

所属学部・学科：農学部 食料生命環境学科 1年

氏名：三宅 孝明

派遣先：ベトナム国家農業大学

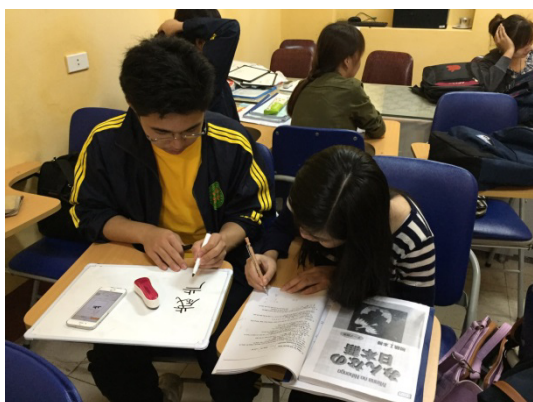
期間：2016年3月7日～3月22日

#### ・日本語教育での指導内容

現地の学生が使用している日本語テキストに沿って行う。参加学生の人数が多くはなかったため、基本は1対1の形式で行っていた。学生一人一人のテキストの進度が異なっていたため、指導内容は、「平仮名の書き方・発音の確認」「会話文・文法の解説」「漢字の書き取り」等、受け持った学生の日本語習得度により異なる。

今回の日本語教室は午前と午後それぞれ1回ずつ計2回1時間半行った。

稀に現地の学生と日本語教室の時間にレクリエーションを行うことがあった。



#### ・現地での交流活動

食事は基本外食になるので、日本語教室が終わった後に行く昼食と夕食と一緒に来て、案内してくれる学生がいる。日本語教室が終わった直後の時間と夕食が終わった後の時間に現地の学生と雑談をする機会が多くあった。特に夜は、以前日本語教室に来てくれていた学生なども合流することもあったので、賑やかになることもあった。

週末はハノイ市内の散策か周辺の商業施設で買い物をしたり、遊んだりすることが多かった。ハノイ市内では観光施設巡りを中心に行動していた。ハノイ市街地だけでなく、ある程度遠出をして観光をすることもできる。

学生の住んでいる部屋に招待してもらい、料理を作ることもあった。

#### ・感想

私は海外に行くのは初めてだったので、大学のプログラムを利用し、受け入れ先について心配する必要のない状態で海外に行きたいと考えていました。そのため、私は宿泊場所が大学内の施設であるこのプログラムに参加することにしました。

実際に参加してみて、現地の担当者が空港に迎えに来てくれること、現地の学生や事務の方がベトナムでの生活をしている間同行してくれていたことから、海外に行くことに興味があるが、なかなか実行に移せない人でも、ある程度気軽に海外に行くことのできるプログラムだと感じました。現地の空港に着けば担当者と合流できることがわかっていたので、今回このプログラムに参加するに当たっての私の心配事がベトナムに到着するまでの

工程に集中していただくくらいです。

私の現地での心配事に言葉の心配がありました。私は英語が苦手です。もちろんベトナム語も話せません。日本語教室の間はある程度日本語が使えるとして、日本語教室が終わった後のベトナムの学生との交流に、英語を使うのではないかと私は恐れていました。しかし、私のその心配は杞憂に終わりました。案内をしてくれたベトナムの学生たちは日本語がある程度話せる人たちばかりで、日本語教室以外の普通の会話でも日本語を中心に使っていました。そのおかげで、現地の学生との交流を気負わずに行うことが出来たと思います。

このプログラムは日本語教室以外の現地での決められた活動がないので、多くの時間を現地の大学生との交流に費やすことができます。週末は日本人の学生が行きたいところを決め、現地の学生と相談する形を取っていました。その他にも、日本の学生が現地の学生の助けを借りて、日本語教室が終わった後に別行動をとることもありました。日本の学生が多くて自由な時間を利用し、日本語教室で知り合った現地の学生の助けを借りて、自分たちの興味に従って行動をすることが出来る。そんな自由なところもこのプログラムの魅力だと思います。

先に述べたように、ベトナムでの生活の中で英語が上手く話せず、そのことで活動に支障を来すことはありませんでした。現地の学生もとても優しく、学生と交流することをストレスに感じることなくベトナムでの活動を楽しむことができました。それでも、日本語教室で日本語を教えているときに日本語で伝えきれない事を英語で解説していたり、日本語より英語を上手に話せるベトナムの学生と英語で滞りなく会話をしている山大学生を見て、「咄嗟の時に英語がすらすらと出てくるくらい英語を話せるようになれば、もっと海外の人との交流を楽しめるのだろうな。」と感じる場面も少なくありませんでした。その他にも、日本語教室の中で、英語のわからないベトナムの学生に平仮名を教えていて平仮名の「お」と「を」の違いを尋ねられた時、会話文の解説をしていた途中、日本語の文法の解説を求められた時に、前者は言葉の壁を後者は普段自分たちが経験や感覚でこなしてきたことを理論立てて解説する難しさを実感することもありました。

海外に行き異なった文化の中で活動したことで、普段日本で生活している時には感じることでできない大きな刺激を受けることができたと思います。そして、ベトナムでの学生大使の活動に参加する中でまた海外に行きたいと思うようになりました。今回のプログラムでは、海外に行くために必要な手続きや準備にかかる労力よりも自分の身になることの方が多くあったと私は思っています。

